

琉球大学学術リポジトリ

[抄録] 田植え作業に革命おこる

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新城 (抄録) メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015109

田植え作業に革命おこる

大阪府立大学教授西内光博士が、発明考案した植苗紙による稲作は30×90 cmの特殊な紙に2条の糸がジグザグにミシンかけされているもので、波形におりたたまれている。電熱温床と同じようにこの谷の部に糞をまき、土をふり、灌水して管理すれば、種籾は紙を破って根をおろす。

本田に植えるときは、その糸の一端を畦畔にそって固定し、糸の他端を引けば、苗は7.5 cmの間隔にある網目の部分に根をからませてならぶ。つぎにその糸の両端を固定すれば、田植えは終わったことになる。

この労力は10aあたり2人かかりで苗取りに30分、苗の本田への配置と、苗のついた糸を引いて田植えをおわるのに50分ぐらいという程度なので、苗運びを含めて10aあたり2人で2時間とみればよいだろう。8時間労働で2人で80（8反）の田植えが出来る。従来の方法では3人の1日かかりで10しか植えなかった。植苗紙を使えば24人分の仕事をたった2人で、やすやすとしてしまう計算になる。

この方法は浅植えの特長としてよく分けつし、繁茂するので従来の方法に比べて収量はまさるとも劣らない。この度、植苗紙の製造販売を目的として大阪市東区北久宝町1-12に宝農材株式会社が設立された。1日も早く市販してもらいたいものです。（農及園 Vol. 38 (4) 740、農界ニュースより：新城）